

日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練における A大学およびA短期大学の取り組み

柏木ゆきえ 新沼 剛 永易 裕子

Efforts of university A and junior college A in a joint disaster relief drill for block 1 branches of the Japanese Red Cross Society

Yukie KASHIWAGI, Takeshi NIINUMA, Yuko NAGAYASU

要旨：平成26年度の日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練に、A大学およびA短期大学の学生が被災者役とボランティア役として参加し、その他の学生は医療救護訓練を中心に見学した。訓練を振り返り、参加した学生の経験を共有し、全体としての学びにしていくことが重要であると感じた。また、災害時の不安を想起させられる状況下での、学生への支援のあり方を考えていく必要があると示唆された。

キーワード：災害、災害救護訓練、災害教育

Abstract： Students of university A and junior college A participated in the 2014 joint disaster relief drill for block 1 branches of the Japanese Red Cross Society. Some of the students acted as disaster victims and disaster-relief volunteers in the drill while others observed the medical relief drill. Reflecting on the drill, the importance of sharing the experiences of the participating students helped provide insights for other students, was confirmed. The necessity to review the support system for students under uneasy situations after a disaster was also suggested.

Key words： disaster, disaster relief training, disaster education

日本赤十字秋田看護大学

Japanese Red Cross Akita College of Nursing

I. はじめに

日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練（以下、訓練と略）は、日本赤十字社防災業務計画に基づき、日本赤十字社第一ブロック（北海道・東北）各道県支部及び赤十字関係団体並びに防災関係機関の協力を得ながら、毎年開催されている。平成26年度は、A大学およびA短期大学（以下、A大学と略）を主会場に実施され、A大学の学生が被災者役とボランティア役として参加した。また、その他の学年は医療救護訓練を中心に見学した。本稿では、訓練の概要を紹介するとともに、調査結果を報告する。

II. 企画・準備

平成25年11月、日本赤十字社秋田県支部からの要請を受け、著者らは、秋田県内の赤十字関連施設の職員で構成される実行委員会のメンバーとして、本訓練の企画に加わった。企画の中で、学生は、医療救護訓練と避難所における避難者支援訓練の、被災者役とボランティア役として参加することになった。災害救護活動は日本赤十字社の第一義的な活動であり、A大学においても救護の向上に寄与できる人材の育成を教育目的に掲げ、全学生を対象に独自の災害救護訓練も実施している。訓練への参加は、被災者の心理状況や防災ボランティアの役割の理解につながると考えた。また、訓練を見学することで災害時に日本赤十字社が果たす役割機能の理解につながると考え、役割実施者以外にも見学を通して学習する機会を設けた。

被災者役とボランティア役は、看護学科2年・介護福祉学科2年とした。両学科の学生とも赤十字原論・赤十字概論を履修し、赤十字の活動を学んでいた。また、A大学の災害救護訓練で被災者の役割を演じていること、介護福祉学科2年は赤十字救急法を履修して搬送方法を学んでいること、事前学習の時間確保ができることを考え決定した。

III. 訓練の概要

1. 訓練内容

1日目 [平成26年9月26日（金）]:

災害救護に関する講義、図上訓練、野営訓練

2日目 [平成26年9月27日（土）]:

地震による災害を想定し、系統だった救護活動を行うことを目的とした実動訓練。実動訓練は「災害対策本部運用訓練」「防災ボランティアセンター運用訓練」「医療救護訓練（現地救護所・巡回診療）」「避難所におけるこころのケア活動・被災者支援活動訓練」「病院における受け入れ訓練」で構成され、1回50分間の訓練を2回行った。

被災者支援活動訓練」「病院における受け入れ訓練」で構成され、1回50分間の訓練を2回行った。

2. A大学の取り組み

1) 学習の目的

- (1) 日本赤十字社の災害救護訓練の実際を知り、日本赤十字社の果たす役割を理解する。
- (2) 模擬傷病者・模擬避難住民を体験することにより、被災者の身体的・心理的状況を理解するとともに、救護者としての態度を学ぶ。
- (3) 災害時にボランティアの果たす役割を理解する。

2) 参加学生

〈看護学科2年・介護福祉学科2年〉

- ・傷病者役：96名（1回の実施人数48名）
- ・避難者役：31名（2回の訓練を通して演じる）
- ・防災ボランティア役：20名（1回の実施人数10名）
- ・救護ボランティア役：20名（1回の実施人数10名）

〈看護学科1・3・4年・介護福祉学科1年〉

- ・見学者：364名（1回目180名、2回目184名）

3) 事前準備

(1) オリエンテーション

[平成26年7月、90分間、各学年学科別に実施]
全学生に日本赤十字社防災業務計画における災害救護活動の基本方針とともに本訓練の目的と内容を説明。

(2) 役割実施者に対する事前学習内容

[平成26年9月22日（月）14：40～17：50]

〈被災者役〉

被災者設定と演じる上での注意点およびメーカーキャップ方法。

〈防災ボランティア〉

避難所で被災者に対する心身の苦痛を軽減する役割。実施内容の説明と練習。

〈救護ボランティア〉

医療救護所での搬送をする役割。搬送方法の練習。

4) 訓練の実際（表1）

訓練当日は、各支部から参集した医療救護班や防災ボランティア約200名が参加した。

学生は、8時にA大学に集合し、傷病者のメーカーキャップを行った。避難所の会場はA大学から離れた場所に設定していたため、準備終了後に、付近の避難所には徒歩で、もう1カ所の避難所にはバスで移動した。

「医療救護訓練（現地医療救護所）」では、傷病者がトリアージエリアに集まり、救護班にト

リアージされ、救護所に搬送されて必要な処置を行う流れであった。「病院における受け入れ訓練」では、病院の救急外来に傷病者が集まり、トリアージされて指定のエリアに搬送されるという流れであった。これらの訓練では、訓練開始の合図があっても、被災者役の学生は不安げな様子で、緊迫感のある演技をすぐに実施することができなかった。A大学の担当教職員や、訓練の実行委員が声をかけて雰囲気作りをし、徐々に演じることが出来るようになった。

避難所における訓練では、被災者役を演じる中で、涙を流すなどの感情移入が強い学生が数名いた。被災者役とボランティア役の学生は訓練終了後、役割ごとに別れ、大学内で訓練における経験を語り合うグループワークを複数の教員同席のもと実施した。避難所で被災者役に

なった学生は特に注意してフォローした。

防災ボランティアは、防災ボランティアリーダーの指示の下、避難所における支援を行った。また、救護ボランティアは、グループで協力しながら、安全な搬送を行うことができた。

見学者は、A班1回目、B班2回目と2班に分かれて見学した。下級生は約9割の出席率であったが、上級生は約5割の出席率であった。見学者は大学校庭で実施された医療救護訓練を見学した。見学エリアから全体の訓練状況は見えても、詳細なやりとりは見えないため、途中からA大学の担当教職員が訓練内容の説明をして補足した。見学終了後は、各自で目標の到達度と訓練を通して感じたことを振り返り用紙を用いて整理した。

表1 訓練の実際（当日のスケジュール）

	救護所 傷病者 A・B班	病院 傷病者 A班	避難者 ①会場	避難者 ②会場	防災ボランティア ①会場 A・B班	防災ボランティア ②会場 A・B班	救護ボランティア A・B班
8:00	集合（場所：体育館） 出欠確認						
8:05	A班と避難者役からメイキャップ開始。救護所傷病者B班はA班終了後準備開始。				A・B班ともに準備、打ち合わせなど行う		A・B班ともに練習、打ち合わせなど行う
8:25		徒歩で会場まで全員移動	バスで会場まで移動	バスで会場まで移動			
8:30							
8:45							
8:50	体育館から5分間隔でグループごとにトリアージエリアに移動	体育館から5分間隔でグループごとに病院玄関西側に移動（1回目9:05に病院前到着とする）	訓練開始準備	訓練開始準備	A班防災Vセンター近くに待機。訓練開始後、センターで受付した後に会場（避難所）に徒歩で移動	A班訓練開始準備	A班訓練開始準備
9:00	1回目訓練開始 A班+避難者役の実施。 B班は待機（学校は体育館、その他の場所は近くの待機場所）						
9:50	1回目 訓練終了						
	体育館移動・メイキャップを落とす	待機	訓練開始準備	訓練開始準備	B班防災Vセンター近くに待機。訓練開始後、センターで受付した後に会場（避難所）に徒歩で移動	B班訓練開始準備	B班訓練開始準備
10:05							
10:15	体育館から5分間隔でグループごとにトリアージエリアに移動						
10:20	2回目訓練開始B班+避難者役の実施。 A班は待機（学校は体育館、その他の場所は近くの待機場所）						
	2回目 訓練終了						
11:10	B班体育館移動・メイキャップを落とす。その他の学生体育館の片付け。		徒歩で移動	バスで学校まで移動	徒歩で移動	バスで学校まで移動	全員で後片付け
11:30~12:30	振り返り		メイキャップ落とす。その後、振り返り		振り返り		

IV. 事後調査

1. 調査方法

1) 調査対象

A大学およびA短期大学学生（計531名）

2) 調査時期

平成26年9月27日（土）

3) データ収集方法

質問紙調査を行った。調査項目は、①目標の達成度、②訓練参加に対する満足度、③訓練を通しての学びとした。調査用紙は、訓練終了後に配布し、回収箱を設置して回収した。

4) 倫理的配慮

訓練終了後、本調査の趣旨を説明した上で、得られた結果は学会等で公表すること、成績に関係なく個人に不利益が生じないこと、個人が特定されないことを対象者に説明した。また、調査用紙に同意の意思を確認するサインをしてもらい、同意が得られたものを調査対象とした。

5) 結果

(1) 回収率

被災者役・ボランティア役の回答数は、127名／167名中（回収率76.0%）であった。見学者役の回答数は、246名／364名（回収率67.6%）であった。

(2) 災害時における日本赤十字社の役割について（表2、表3）

「日本赤十字社の災害救護訓練の実際を知り、日本赤十字社の果たす役割を理解することができたか」という質問を、役割実施者と見学の学生の全員に行った。被災者役・ボランティア役は、【非常に良くできた】【やや良くできた】の回答が約9割であったが、見学者では、約6割であった。

被災者役・ボランティア役は、「協力して助け合いの精神で救助に当たっていた」「日赤の救護班の皆さんの行動を見て、ただ助けるだけでなく、心のケアも大事にしているというのを理解した」などの理由があげられており、訓練に参加して間近でその実際を見ることで、日本赤十字社の救護員の役割を感じることができたようだった。

見学者からは、「支部という単位で日本赤十字社の本来の姿を知ることができた」「スタッフの方が説明してくれたので大体分かった」などの見学から理解につながったという回答があったが、「見学する位置が遠くて何が行われているのか理解しきれなかった」という回答があった。

表2 日本赤十字社の果たす役割を理解することができたか 〈被災者役・ボランティア役〉

	n =127	%
1. 非常に良くできた	48	37.8
2. やや良くできた	66	52.0
3. どちらともいえない	8	6.3
4. あまりできなかった	2	1.6
5. 全くできなかった	1	0.8
6. 回答なし	2	1.6

表3 日本赤十字社の果たす役割を理解することができたか 〈見学者〉

	n =246	%
1. 非常に良くできた	29	11.8
2. やや良くできた	122	49.6
3. どちらともいえない	40	16.3
4. あまりできなかった	38	15.4
5. 全くできなかった	16	6.5
6. 回答なし	1	0.4

(3) 被災者役を実施して（表4）

「今回の体験を通して、被災者の身体および心理状況を理解することができたか」という質問に対して、91名／127名中の回答が得られた。【非常に良くできた】【やや良くできた】の回答が約9割であった。理由として、「運ばれるときに声をかけられないで、いきなり持ち上げられると怖かった」「不安な状況で、さらに手当てが遅れると不安が増すと思った」「傷を負っているのに痛みだけでなく、今後の不安や避難所での生活の不安があることがわかった」「まわりの泣いている声や看護師、医者などがあわただしく動いていると、どんどん不安になるのを感じた」などの回答があり、救護所と避難所における訓練の両方の訓練で、被災者の状況を理解していた。

表4 被災者の身体および心理状況を理解することができたか

	n =91	%
1. 非常に良くできた	28	30.8
2. やや良くできた	55	60.4
3. どちらともいえない	6	6.6
4. あまりできなかった	1	1.1
5. 全くできなかった	1	1.1

(4) ボランティア役を実施して (表5)

「今回の体験を通して、災害時におけるボランティアの役割を理解することができたか」という質問に対して、36名/40名中の回答が得られた。【非常に良くできた】【やや良くできた】の回答が約9割であった。理由として、「搬送という役割だけではなく、手当や声かけなど臨機応変に対応することが必要になってくる」「実際に経験してみても、避難者の方のニーズを理解して行動することが大切であるということを理解した」などの回答があり、状況を判断して、対象のニーズに沿った援助をすることがボランティアに求められると理解していた。

表5 災害時におけるボランティアの役割を理解することができたか

	n=36	%
1. 非常に良くできた	14	38.9
2. やや良くできた	18	50.0
3. どちらともいえない	2	5.6
4. あまりできなかった	2	5.6
5. 全くできなかった	0	0.0

(5) 訓練参加の満足度について (表6、表7)

「今回の訓練に参加してどう感じたか」という質問を役割実施者と見学の学生の全員に行った。被災者役・ボランティア役は、【非常に満足できた】【満足できた】の回答が約8割であったが、見学者では、約5割であった。

被災者役・ボランティア役は、「普段体験できないようなことを体験できて、とても良い機会になった」「手当てを受けながら、救護の実際の動きを見ることができて勉強になった」など、訓練に参加したことを肯定的に受け止めていた。しかし、不満の理由として、「傷病者の心理などは分かったが、あまり緊張感が感じられなかった」という評価もあり、訓練のリアリティに関して不満を感じているようであった。

見学者からは、「看護師の役割だけでなく、医師や主事・薬剤師などの連携と他のボランティアや役割との連携を知ることができた」「実際の医師、看護師が救護訓練を行っているのを見て、やっぱり自分たちが訓練するよりとても迅速だった」など、多くの支援者が

協力して行動する災害救護の実際を見られたことに満足するとともに、学内の災害救護訓練との差を実感していた。しかし、「今がどうい状況なのかが良くわからなかった」「遠目から見ていたので、実際にどのようにトリアージが行われている、どのような声かけが傷病者に対してされているのかわからなかった」ので知りたいと思った」など、訓練の内容が理解できない部分に不満を感じていた。

表6 訓練に参加してどう感じたか
(被災者役・ボランティア役)

	n=127	%
1. 非常に満足できた	18	14.2
2. 満足できた	80	63.0
3. どちらともいえない	21	16.5
4. やや不満に感じた	6	4.7
5. 非常に不満に感じた	2	1.6

表7 訓練に参加してどう感じたか
(見学者)

	n=246	%
1. 非常に満足できた	16	6.5
2. 満足できた	120	48.8
3. どちらともいえない	67	27.2
4. やや不満に感じた	36	14.6
5. 非常に不満に感じた	5	2.0
6. 回答なし	2	0.8

V. 考察と今後の課題

被災者役の体験から、被災者の心理的状況を理解し、被災者側の立場にたった援助の必要性を学ぶことができていた。ボランティア役の体験からは、状況判断能力が必要なことや避難者のニーズに沿った援助をすることが大切であることなど、援助者に求められる態度を学ぶことができていた。また、訓練を通して救護員として活動を行う自己の姿がイメージ化され、学習の動機付けになっていた。

一方、訓練の見学は災害時に日本赤十字社の果たす役割・機能の理解につながると期待し企画したが、見学者の満足度に課題が残った。抽象度の高い言語的な教材(テキスト)と具体的な教材(経験)を併用することで学習の理解がより深まると言われており(阿部, 2013)、見学の目的並びに見学のポイント等を明確に学生に伝え、言語的な教材と具体的な経験が結びつくように工夫するこ

とが必要だと考える。

訓練の参加から貴重な学びが得られているが、A大学の所在地では、訓練が7年に1度しか開催されていないため、毎年参加できるわけではない。今後、参加した学生の経験を共有し、全体としての学びにしていくことが重要である。

今回、学生への被災者役を演じることによる心的負荷を懸念し、事前の説明や実施後に経験を自由に語る機会を設けた。実践的な災害医療救護訓練を行うため、模擬患者研究会が作られ活動しており、つらい役を演じた際は、その気持ちを持ち帰らないことを重要なポイントの一つとしてあげている（岡野谷，2008）。また、模擬患者が参加する学習では、実施直後に振り返りをすることや時間をおいて反省会や学習会をすることが、模擬患者の気持ちを整理するうえで重要であると述べている（渡邊，中村，吉川，2011）。効果的な訓練のためには実際の災害現場のような混乱と緊張感が必要であるが、参加者がその状況から受ける心理的影響は大きい。そのため、安全な体験をできるような支援のあり方を今後も考えていく必要がある。

VI. おわりに

今回、訓練の参加の機会を与えられ、大きな学習成果を得たことは、意義深いことである。しかし、見学の方法、経験から得られる学びの共有方法、疑似体験からくる心理的影響の軽減方法の課題が残った。そのため、今回の訓練で得たものを今後活かしていきたい。

本論文において利益相反に該当する事項はない。

引用文献

- 阿部幸恵. (2013). 臨床実践能力を育てる 看護のためのシュミレーション教育, 医学書院, 19-20.
- 岡野谷純. (2008). 災害救護訓練における「模擬患者研究会」の取り組み, EMERGENCY CARE, 21 (5), 97-103.
- 渡邊由加利, 中村恵子, 吉川由希子. (2011). 大学において模擬患者をいかに活用するか, 看護教育, 52 (8), 586-592.